

News Letter No.17

京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム

Inter-Graduate School Program for Sustainable Development and Survivable Societies

Contents

- 17年のGSSプログラムを振り返って
- GSS教員からのメッセージ
- GSS総括シンポジウム2017「教訓と未来への取り組み」の開催報告
- 2017年度 GSS入学式及びオリエンテーション
- 博士課程教育リーディングプログラムフォーラム2017
- GSS実習報告会の開催（2017）及び今年度のスケジュール（2017-2018）
- GSS総括ステートメント
- 協力教員の自己紹介
- GSS履修生の紹介
- 編集後記



7年のGSSプログラムを振り返って

寶 馨 防災研究所教授



博士課程教育リーディングプログラム・複合領域型（安全安心分野）で採択されました「グローバル生存学大学院連携プログラム」（GSSプログラム）は、2011年度から2017年度までの7年間の最終年度を終えようとしています。もちろん今後もプログラムは存続しますが、補助金期間が終了するため、2018年4月からは大学としてあるいは参画部局としての協力・支援が必要となって参りますので、関係各位のさらなる御理解をお願い致します。

毎学年20名の学生を受け入れるGSSプログラムには、これまでに92名の学生諸君が履修しています。そのうち12名が2017年9月までに博士の学位を取得しました。6割の学生が学位を取得していることになり、これは通常の博士後期課程の修了率と比べて高い方であり、GSS学生と指導教員らの努力がうかがえます。今年度は2期生が修了しますが、10名程度の修了生を見込んでいます。

4つの必修科目（グローバル生存学、リスク学通論、安全安心文化学、生存基盤食料学）や選択必修科目、選択科目、学際ゼミナールといった座学に加え、フィールド実習、インターンシップ研修、産学連携プロジェクト、国際共同プロジェクト、国際学術交流など多様なカリキュラムを全て英語でこなさねばならないのは学生諸君にとって大変ハードではあります。しかしながら、それによって鍛えられリーダーシップを身につけ、5年（医学研究科は4年）で

GSSプログラムを終え、かつ学位も取得した多くの事例が実現しているので、決して無理なプログラムではなかったと言えます。

2018年度入学生からは、財政支援が減ることも勘案して、カリキュラムは見直し、少し軽量化しますが、GSSプログラムの質を維持しつつ、新たな展開に向かって参りたいと存じています。

最終年度ということで2017年10月6日～7日にGSS総括シンポジウム“Lessons Learned and Future Endeavors”を行いました。このシンポジウムでは、この7年間、国際アドバイザーとしてこのGSSを見続けてきていただいた元国連大学学長のHans van Ginkel（ハンス・ファン・ヒンケル）先生から、「このGSSはサクセスストーリーである。こうしたプログラムはさらに多くの京大生が履修すべきだ」と仰っていただきました。同シンポジウムでは、GSS総括ステートメントをとりまとめました（P6）。このステートメントには、私たちの7年間の成果が要約されていますので、御参照いただければ幸いです。

最後に、本プログラムの実施に当たって数々の支援をいただきました、博士課程教育リーディングプログラム運営会議、同運営委員会の先生方、国際アドバイザー、産官学アドバイザーの皆様、参画された9研究科25専攻、3研究所の皆様、そして何よりも本プログラムの主役である学生諸君に心より御礼申し上げます。

GSS教員からの メッセージ

西瀨光昭
東南アジア地域研究研究所教授



東南アジア地域研究研究所のGSSへの取り組み

東南アジア地域研究研究所は、文系（社会科学系）と理系の研究者が協力して、分理融合的アプローチにより東南アジアを中心とする世界の各地域の特色を明らかにして、その情報発信を目指す地域研究機関として知られています。このような学際的かつ国際的視点は、GSSが目指す方針と合致しますので、当研究所は、GSS 履修生の研究指導、学際セミナー、およびフィールド実習系科目の担当を通して、このメリットを反映した教育に貢献できるように心掛けてきました。とりわけ、海外のフィールドでの活動を通してしか会得できないノウハウは、GSS 修了生が将来ワールドリーダーとして、世界各地で活躍する時に大いに役立つと考えられます。西瀨はこの点を重視し、当研究所を代表して実習系科目タイプB〔フィールド実習または国際学術交流プログラム〕の担当を引き受けてきました。特に強調したいポイントは、実践型教育の重要性です。西瀨が関与している食の安全安心分野での実際の国際共同研究または国際的管理・運営関係の諸活動^{*1~*3}を利用して、GSS 履修生にアシスタントとして活躍してもらう機会を提供し、近い将来役に立つ実用的ノウハウを会得してもらうようなプログラムを考案して実施してきました。

*1) 日米医学協力研究計画コレラ・細菌性腸管感染症専門部会会長として、1年おきに国際シンポジウム（日米合同年次会議）を開催。GSS 履修生には、国際会議での質疑応答、管理・運営について学んでいただきました。

*2) 国際連合食糧農業機関（FAO）／世界保健機関（WHO）傘下のコーデックス委員会の食品衛生部会（Codex Committee on Food Hygiene）関係のアドバイザーおよび作業部会議長をつとめた関係で世界標準検査法の候補に選ばれた方法を開発し、その評価のためのワークショップを世界各地で開催。GSS 履修生には、ワークショップで様々な外国人参加者に英語で技術指導をする経験を通して、ハート・ツー・ハート・コミュニケーションが最も重要であることを認識してもらえたら幸いです。

*3) 国際共同研究のカウンターパート機関の訪問・見学。GSS 履修生は、どのような国でもカウンターパート同士がお互いを良く理解・尊重する事が、国際共同研究の基本であることに気が付いてくれたと期待しています。



上：ペルーのワークショップで、参加者に内容説明をするOscar Escalante (GSS履修生)
下：インドネシアのワークショップの参加者とのスナップ写真

以上の思い出が伝わることを願いつつ、記憶に残る実習当時の代表的トピックを以下に簡単に紹介します。最初の2012年度は、実習参加者のエネルギー、引率者の期待および予算は非常に豊富で、国内および海外で実習を実施しました。国内では、アカデミックアドバイザーを米国から京都へ招聘し、特別講演の後、履修生とともに千葉大学での国際シンポジウム^{*1}に参加していただき、その間各履修生に直接アドバイスをいただきました。海外実習は、マレーシアとシンガポールでのワークショップ^{*2,3}に始まり、直後のバンガラデッシュのスラム街訪問による、経済格差、カルチャーショック、政治暴動・外出禁止令等の洗礼を経験、中国の青島で日本向け食料生産基地を対象とする食品安全研究所の見学で幕を閉じるという濃厚で印象深い実習でした。

南米のペルーとチリで続けてワークショップを実施した時（2013年度）^{*2,3}、二国間の関係がコカ・コーラとペプシの関係に似ているという西瀨のジョークに履修生が喝采してくれたこと、および米国ビザが問題である外国人履修生に考慮して、全員ドバイ経由のルート（片道40時間）を選んだ事が心に刻まれています。

2014および2016年度にワークショップを開催したインドネシア^{*2,3}では、履修生に空港の通関手続きや郵送した実験用品の受取に立ち会ってもらい、独特の経済習慣を理解しておく必要性を実感してもらいました。

2017年度は、この2月にタイ南部で、3日間の国際シンポジウム^{*1}に続いて、関連する2日間のフィールド調査（養殖場と離島調査）を実施^{*2,3}できることになりました。リーディング大学院全体を通して最初の修了生（GSS）であるOscar Escalante君がかつて開発した簡便検査法の威力を発揮できるチャンスを設けましたので、参加するGSS後輩への良い刺激になるであろうと楽しみにしています。

「GSS 総括シンポジウム 2017 教訓と未来への取り組み」の開催報告

清水美香 GSS特定准教授

2

2017年10月6日～7日、「GSS総括 シンポジウム2017 教訓と未来への取り組み」が京都大学稲盛財団記念館にて開催されました。本年度が文部科学省支援下でのGSSプログラムの最終年度になることから、GSSプログラム活動を振り返り、学際的大学院教育プログラムの今後の展望を図るために、本テーマでのシンポジウムを企画しました。GSS渉外委員会の教員メンバーとGSS学生協議会メンバーから成る共同チームがシンポジウム準備を行い、下記のようなセッションを設けました。

Session I : Engagement in the GSS Program:

Reflections by the Respective Graduate Schools and Institutes

Session II : Contribution of GSS to Future Career Perspectives:

Individual Experiences Shared by Students

Session III : Fostering Human Resources as Future Global Leaders

through University and Industry Collaboration

Session IV : Expanding, Deepening, and Achieving Research Goals

through GSS

Session V : Review of GSS Operations by the Executive Board

Plenary Discussion : Lessons Learned and Future Endeavors



セッションIIとIVはGSS 学生によって準備され、そうしたセッションはGSS 教員およびGSS プログラム外部から招聘した国際／産官アドバイザーによる他のセッションに織り込まれました。セッションIIIは、産官アドバイザーらによるインスピレーショントークの後、それらのアドバイザーとGSS 教員との間でパネルディスカッションを行い、人材育成について現行の大学院プログラムと産業界の最新の見方とのギャップに焦点を当てたユニークな企画となりました。さらに、統括ディスカッションのセッションでは、それまでのセッションから引き出された教訓に基づいて、すべての参加者にグループ対話に参加するよう求め、現行で実施されている「学際性」についてのギャップを明らかにし、その学際性をより良い問題解決に向けた行動に移すための具体的な方法を議論しました。

全体的に、GSS のこれまでの活動を未来への取組みに繋げるために建設的な議論や対話を行うことができました。そうした結果は、シンポジウムのクロージングで草案作成されたGSS 総括ステートメントに反映されました。さらに、このシンポジウムの組織化におけるすべての過程において、GSS のエッセンスが響き渡っていたように思われます。それは、GSS シンポジウムの準備に深く関わってきたGSA 副会長の中村亮介さん(GSS L3)による下記のコメントにも表されています。

「本シンポジウムにおいて、私は学生セッションの立案と企画の段階から参加しました。その過程では、他分野の学生と様々な面で意見交換して自分では思いつかないような斬新なアイデアをもらう場面もありました。このような普段自分の専門分野に留まっていたでは得られない経験は刺激的で、他分野の学生同士の関わり合いを通じ、分野を跨いだ協力(学際性)の重要性を再認識しました。ただ学際性と言っても、実際には学生がそれを行動に移す機会は未だ限られているのが現状だと思います。本シンポジウムは学生が能動的に準備を進める点が重要なポイントで、まさにこれから学際性を大学の外でも実践していこうとする学生にとってのステップアップの場と言えるのではないのでしょうか。私自身幸運にもシンポジウムを能動的に引っ張る立場に立たせてもらい、他分野の学生のみならずGSSに関わる様々な方との出会いを通じ、これからの学際性のあり方を探る上で大変参考になる素晴らしい経験でした。このような貴重な機会を与えてくださり、ありがとうございました。

2017 年度 GSS 入学式及びオリエンテーション

近藤 久美子 GSS特定准教授

2

017年8月1日、東一条館の思修館ホールにて、GSSプログラムの入学式及びオリエンテーションが行われました。今年度は、5研究科（理学・医学・工学・アジア・アフリカ地域研究・地球環境学舎）に所属する計12名（L1：9名、L3編入生：3名）が入学しました。新入生には、インドネシア・ギニア・エチオピア・フィリピンからの留学生（5名）も含まれます。

前半の入学式にはGSS 特定教員・協力教員を含む関係者が列席し、同プログラムユニット長／カリキュラム委員長の塩谷雅人教授の司会進行で執り行われました。各学生が紹介された後、プログラムコーディネーターの寛馨教授より新入生への歓迎のスピーチがあり、新入生代表として、工学研究科（社会基盤工学専攻）のAulia Febianda Anwar Tinumbang さんが宣誓を務めました。

後半のオリエンテーションでは、学生会（GSA）のL2 山本浩大さんが、2017年10月開催のGSS 総括シンポジウムについて紹介し、伊藤伸幸 GSS 特定准教授より、研究活動経費の説明がありました。また、ePortfolio 担当の近藤久美子 GSS 特定准教授より、新入生が今後、国内外で実施する研究活動のプラン及びレポート提出時に用いる“GSSfolio (Karuta 1.1)”システムに関する説明と、実習（9月Homeroom Session）の案内を行いました。



上：プログラムコーディネーター寛馨教授のスピーチ
下：新入生代表のA.F. Anwar T.さん（L1）による宣誓

博士課程教育リーディングプログラムフォーラム 2017

山本浩大 工学研究科（L2）

2

017年10月19日（事前議論）、20日、21日に名古屋大学で博士課程教育リーディングプログラム フォーラム2017が開催され、7名のGSS履修生（山本、櫻庭、青木、Tien、Eva、岡田、Ranit）が参加しました。本フォーラムには、33大学、62プログラムが集結し、リーディングプログラムの成果や身につけたスキルの発信とともに、大学院教育に受け継ぐべき財産（レガシー）について議論しました。

参加者は、異なるリーディングプログラムから構成されるチームに入り、各々の経験を踏まえ、博士人材の研究及びキャリア支援やプログラムの定着などのプログラムの出口戦略について議論しました。各チーム、産業界に向けた博士人材のカatalogやリーディングプログラムのテーマに沿った競争的研究費の作成など具体的な提言案がみられました。最終日に投票で選ばれたチームが、産官学の有識者に向けて壇上で発表を行いました。最終発表は、名古屋宣言として取りまとめられました。また、ショートプレゼンテーションでGSSプログラムの成果を発信し、ポスターセッションではGSSプログラムで取り組んだ研究活動の成果を紹介しました。

基調講演では、濱口道成氏（国立研究開発法人科学技術振興機構理事長）及び吉田晴乃氏（BT ジャパン株式会社代表取締役社長）から、グローバルに活躍する人材像として、濱口氏からは、社会で多様に活躍する博士人材への期待を、吉田氏からは、夢をかなえるための強い意志の重要性を教えていただきました。多分野で活躍していく私達にとって有意義なアドバイスとなりました。

今回のフォーラムでの主な成果は、全国のリーディングプログラムの学生に会い、研究活動やキャリアの見方について見聞を広めることができた点です。フォーラムの休憩時間や終わった後も、それぞれの研究活動や将来のビジョン、さらには博士人生の在り方まで語り合い、様々な価値観に触れることの素晴らしさを知り、刺激を受けました。また、フォーラムに参加すること、チームビルディング、コミュニケーション能力や自分の意見を発信するアピール力などのリーダーシップの実践経験ができました。

GSS 実習報告会の開催（2017）及び今年度のスケジュール（2017-2018）

近藤 久美子 GSS特定准教授

第

19回・第20回GSS学生実習報告会が、それぞれ東一条館の3会場（表1）と2会場（表2）で開催されました。

2017年7月18日の報告会では、教育・工学・情報学・医学・農学をはじめとする8研究科のGSS履修生の発表（L2:2名、L4:1名、L5:8名）に加えて、アジア・アフリカ地域研究研究科・地球環境学舎に在籍する編入生（フィリピンとインドネシアからの留学生を含む、新L3:3名）の博士論文研究基礎力審査（QE: The Doctoral Qualifying Examination）も同時に行われました。

9月の第20回報告会では、計7名（中国・インドからの留学生4名）が参加し、企画・実施に時間を要する産学連携プロジェクトや国際共同プロジェクトに関する発表が、前回に続き多くみられました（L5:3名、L4:2名、L3:2名、うち1名は、2種類の実習に関するプレゼンテーションを実施）。

今年度の実習報告会（計5回）のうち、前期分（3回）が終了し、後期の報告会も東一条館での開催が予定されています（2017年11月28日、2018年1月23日）。

表1: 第19回GSS 学生実習報告会（2017年7月18日開催）（発表者・題目）

Shishukan Hall (B1F)		
Name		TITLE
Mr. Wenlong Wang	Industry-Univ. Collaborative Project	Whole Effluent Toxicity Test of Oil Refining Wastewater and Marine Water from PETRONAS Factory, Malaysia
Mr. Van Tien Pham	Industry-Univ. Collaborative Project	The Simulation of Landslide Dams in the Kii Peninsula, Japan
Ms. Maki Naito (QE)	Internship	Coordinating Training Program for Myanmar Forest Officers
	Industry-Univ. Collaborative Project	Creating Important Habitat Map with Several Sectors in Tohoku Region
Ms. Katrina San Juan Navallo (QE)	Int'l Academic Exchange	Report of Past International Academic Exchanges
	Int'l Cooperation Project	Report of International Collaboration Project with Asian Development Bank (ADB)
Ms. Annisa Satwika Lestari (QE)	Internship	Report of Internship at BiPRO GmbH
Conference Room (1F)		
Name		TITLE
Mr. Ranit Chatterjee	Industry-Univ. Collaborative Project	Possibility of Community Based Business Recovery Platform in Bungamati
Mr. Wenlong Wang	Int'l Cooperation Project	Environmental Risk Assessment of Insecticides in Drinking Water, Agricultural Wastewater in Indonesia
Mr. Van Tien Pham	Int'l Cooperation Project	Integrated Community-Based Disaster Risk Reduction Program in Nepal
Mr. Takashi Sugiyama	Int'l Cooperation Project	International Cooperation Project in Mexico
Ms. Chiyoung Hwang	Field Training	Interviews for Homeless People Regarding Barriers and Facilitators to Tuberculosis Examination in Osaka City, Japan
Ms. Shaojun Yuan	Field Training	The Importance of Leadership in the Comparatively Backward Areas
Ms. Mei Nakazawa	Internship	Internship at the Institution of Medical Care for HIV/AIDS in Uganda
Lecture Room (1F)		
Name		TITLE
Ms. Ei Ma	Int'l Academic Exchange	Academic Exchange Activities at the International Workshop and Conference
Ms. Georgina Seera	Internship	PRESERVE BIO DIVERSITY, DEFEND THE PLANET --A Report about Internship with the Slow Food Foundation in Uganda
Mr. Ranit Chatterjee	Int'l Academic Exchange	Learnings from AI-KAB Conference in Taiwan
Ms. Mei Nakazawa	Industry-Univ. Collaborative Project	A Field Survey of the Status of HIV Patients and Workshop on Incorporating HIV Prevention in Uganda
Mr. Matomu Itakura	Int'l Cooperation Project	International Joint Gravity Observation in Indonesia
Mr. Kensuke Asai	Int'l Cooperation Project	International Workshop on Philosophy as Translation: International Cooperation Project in Warsaw

表2: 第20回GSS 学生実習報告会（2017年9月26日開催）（発表者・題目）

Shishukan Hall (B1F)		
Name		TITLE
Ms. Yongxue Shi	Internship	Internship in International Hydrological Programme at UNESCO
Ms. Chikara Okada	Int'l Academic Exchange	Attendance at International Academic Conferences
Ms. Chong Xu	Int'l Cooperation Project	How to Deal with the Food Crisis through Advanced Plant Breeding Technology
Ms. Yukiko Tateyama	Int'l Cooperation Project	Socio-epidemiological Study on Risk Factors of Non-communicable Diseases Among Adult Population in Rural Zambia
Lecture Room (1F)		
Name		TITLE
Mr. Wenlong Wang	Int'l Academic Exchange	International Academic Exchange: Academic Conferences in the United States and Europe
Ms. Yukiko Tateyama	Industry-Univ. Collaborative Project	NCD and HIV Services Integration Project --Development of the Community-Based NCD Screening Model for Locals
Mr. Ranit Chatterjee	Int'l Cooperation Project	Training of Local Business Owners in Bungamati
Ms. Ayako Kohno	Int'l Cooperation Project	Conducting an International Seminar in Switzerland on "Aging and Dignity"

GSS総括ステートメント

博

士課程教育リーディングプログラム「グローバル生存学大学院連携プログラム」(GSSプログラム)が2017年10月6~7日に行いましたGSS総括シンポジウム“Lessons Learned and Future Endeavors”において、GSSに参画した私たち、学生、教員及びすべての参加者は、以下のような7年間の本プログラムの成果を確認し、GSS総括ステートメントとしてここにとりまとめました。支援・協力していただいた文部科学省、日本学術振興会、学内外のあらゆる組織や支援者の皆様に感謝申し上げます。

1. GSS(グローバル生存学)は、持続可能な開発に貢献するため、人間や社会の安全を脅かすいろいろな事象の発生原因を究明し、それらのリスクを防止・回避・軽減する、または解決する方策を見いだすための「知」を結集し、体系付け、実際に行動を起こす包摂的・超学際的な学問分野です。この理念のもとに大学院教育プログラムを実施してきました。学際的な大学院教育プログラムの一つの成功例と言えます。
2. 総合大学である京都大学の特長を活かし、9研究科25専攻、3研究所という12部局が密接に協力して、学際的・国際的なグローバル生存学の大学院教育プログラムを確立しました。このような多数の部局の協力体制は、初めてのチャレンジであり、極めて順調に異分野交流を進めることができました。
3. 2017年9月までの間に12人の博士を生み出しました。また、学位取得に至っていませんが、プログラムは既に修了し、博士論文の作成をしている途上の人が5人います。これらの17人は、大学の教員(3人)、ポスドク研究者(8人)、公的研究所(2人)、地方自治体(1人)、民間会社(3人)に進んでいます。
4. GSSプログラムは学際的なビジョンを育てるためにユニークなコースワークを提供しています。学生はグローバル生存学の異なる局面に焦点を当てた4つの必須クラス(リスク学通論、安全安心文化学、グローバル生存学、生存基盤食科学)を取ることが義務付けられています。これは、グローバル生存学の基礎科目として、GSS科目群の骨格を形成しています。
5. インターンシップ系科目(インターンシップ研修、フィールド実習、産学連携プロジェクト、国際共同研究プロジェクト)においては、海外46か国、国内17か所に学生諸君が訪問しました。その中には、企業14社、NPO/NGO 17団体、公共団体39社、国際機関5機関、海外大学32大学などを含んでおり、産官学連携、国際共同の観点からも大いに実績を上げました。
6. リーダーシップ目標10項目を掲げ、その達成に向けて学生諸君は自らを鍛えてきました。この10項目の目標は、それぞれ履修カテゴリと体系的に関連付けられており、その達成度をeポートフォリオ(GSSfolio)において確認することができました。GSSfolio(Karuta 1.1)は、履修管理、進捗管理、また、学びの記録の保存においても極めて有用であり、学生自身、指導教員、メンター教員、事務職員が相互にインタラクティブに海外にいても確認し合える先進的なシステムです。これもGSSプログラムがあってこそ初めてできた大きな成果です。
7. 本プログラムで雇用された特定教員12人は、プログラム担当者の役割も果たし、プログラムの推進力として、また、学生のメンターとして大いに活躍してくれました。プログラム期間中に助教から准教授に昇任したり(2人)、部局に溶け込んだり(2人)、他大学の准教授に昇任したりしました(4人)。このGSSが、彼ら/彼女らにとっても良い学びの機会となり、若手教員の人材育成にも貢献したと言えます。特定教員の皆さんの貢献を賞賛し、感謝の意を表します。
8. プログラム担当教員は、9研究科25専攻、3研究所から63人が参画しました。プログラム教授会のメンバーとして、毎月の教授会に参加し運営の要となるとともに、指導教員としてあるいは他研究科の学生の副指導教員となり、また、各種委員会のメンバーの役割も務め、GSSプログラムの実践に大いに協力致しました。多くの異なる研究科・研究所の教員同士が本プログラムにおいて協力し合うチャレンジは異分野交流、学際的な教育・研究の推進に大いに成果を上げました。
9. 大学は、博士課程教育リーディングプログラム運営会議、同運営委員会を設置し、また、教育制度の改革を行い、付記型学位を可能にしてリーディングプログラムの実施運営を円滑に行いました。また、東一条館などの施設を建造するなど、学生諸君の新たな学びの場、交流の場を創設し、大きな成果を上げました。
10. 学生諸君は、自発的にGSS学生会(GSA)を結成し、毎年の国際アドバイザー会議の企画から運営に至るまで主導的に活躍しました。また、GSAにおいて学生相互のコミュニケーションを促進し、様々なイベントを行ってきました。このGSAは、GSSの学生の同窓会組織としても機能することを期待しています。
11. 最終的に、このGSSプログラムは、地球社会の安全安心を念頭に置いて、人類が直面する様々な問題を解決すべく、社会のリーダーとして活躍する人材が育つ場を確立することができました。ここで育った学生諸君は、高い専門能力、優れた社会俯瞰力、タフで人間の魅力を備えた、京都大学WINDOW構想に言う「野生的で賢い」リーダーとして持続可能な地球社会の実現のため大いに活躍してくれることを確信致します。
12. GSS総括会議2017では、GSS学生・教員が協働し、産業・国際アドバイザーの協力を得て、GSSのこれまでの活動を振り返り、教訓と今後の取り組みの在り方を引き出しました。その教訓には、より人文的・社会的な側面を取り入れる必要性や、学際性についてより具体的なステップを明確にする必要性が含まれます。そうした教訓に基づき、持続可能性と生存性に関わる学会の設立などが提案され、2日間の議論を通して、GSSが実施している学際的教育プログラムをより包括的かつ理論的に表現する「モジュールベースの概念モデル」に到達しました。
13. 上記の教訓や提案が今後の大学プログラムで考慮され、これまでのGSSの取り組みが実を結び、次のステージに向けてさらに磨かれることを望みます。

協力教員の自己紹介



西嶋 一欽

防災研究所
気象・水象災害研究部門
准教授

G SS関係者の皆さん、はじめまして。西嶋一欽です。私のオフィスは宇治キャンパスにあります。宇治キャンパスは、私が所属している防災研究所を含む4つの研究所、ユニット、サテライト部局などで構成されています。宇治キャンパスは、学生であふれている吉田キャンパスや桂キャンパスとは少し雰囲気が異なります。例えば、日中キャンパスではあまり人を見かけません。皆さん、研究室や実験施設のなかで黙々と研究に勤しんでいるのです。でも、お昼ご飯の時間になると生協食堂に続々と人が集まってきます。宇治キャンパスの研究者を見なければ、お昼ご飯の生協がチャンスです。

さて、私自身の紹介です。私は2013年に防災研究所に着任しました。防災研究所に来る前に、スイス連邦工科大学チューリヒ校（ETH Zurich）で研究員として勤務した後、デンマーク工科大学で教員として働いていました。ETH Zurichでの博士後期課程の時代も含めると、合計10年間ヨーロッパにいたことになります。さすがに10年もヨーロッパにいと飽きます。それで日本に帰ってきました。

私の研究テーマは防災です。最近の研究課題の一つは、開発途上国の在来建築の防災です。どうすれば開発途上国の被害を減らせるか？建物を強くすれば、被害を減らせるのですが、「それをどう実現するか」が課題です。地域に根付いた建築デザインに込められた意味を紐解いて構造性能向上にどう結び付けていくか。また、より広く、防災に関する『在来知』が有する災害対応能力を科学的に再評価することで、その合理性や課題点を明らかにする。これが、私の今の興味です。

私は、防災研究所に所属しています。専門分野は地球物理学、特に沈み込み帯で発生する地震学です。海底における地震学および測地学的な観測に基づく地震の発生予測を研究対象としています。内容として、巨大地震発生のメカニズム、巨大地震域の周辺で発生するスロー地震、巨大地震とスロー地震の相互作用などをテーマにし、国内外における海底地震・測地観測、地震波形解析、地殻変動解析、室内摩擦実験といった手法を使って研究しています。世界の沈み込み帯で発生する巨大地震やスロー地震、さらには前震・余震活動の根本的理解に基づき巨大地震の発生予測モデルを構築することが目標です。

最近には特に海外の研究機関と協力して、ニュージーランドやメキシコなどの沈み込み帯の海底に海底地震計や海底圧力計の設置を進めています。言語や文化の異なる地域で現地の研究者と研究を進めることは容易ではありません。その一方、国際共同研究を進める中で生まれる新しいアイデアは常に刺激的で、研究の苦勞を忘れさせてくれます。

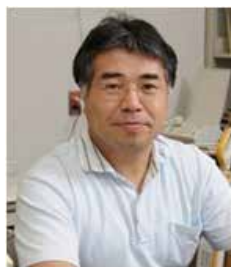
GSSの皆さんもそれぞれ価値観の異なる多くの研究者らと、密接に連携して研究を進めることが求められています。国際共同研究を行う際には、共同研究者やその相手国が求めるものは何か、それに答えるためには自分たちが何を行わなければならないか、正確に見極める必要があります。また、その様な状況であっても自分が行いたいことを正確に伝えて、本来の目的を見失わないことも大切です。国際共同研究では、このような当たり前のことも簡単にはできないことが多いと思いますが、相手の価値観を尊重しつつ、多くの価値観から生まれる新たなアイデアに基づく研究を皆さん楽しんでください。



伊藤 喜宏

防災研究所
地震予知研究センター
准教授

協力教員の自己紹介



近藤 祥司

京大病院地域ネットワーク
医療部門准教授

私

のラボでは、17年近く、「老化と代謝」を主要テーマにしています。大きくは二つの柱からなっています。

1つは、我々が長寿遺伝子としてクローニングした解糖系酵素ホスホグリセリン酸ムターゼ PGAM の機能解析です。解糖系代謝亢進は多くの癌細胞で従来観察され（ワールブルグ効果）、逆に解糖系低下による細胞老化誘導を我々が世界初で報告しました。解糖系が老化から癌化への転換を制御し、そのカギが PGAM である可能性を分子レベルで検証しています。従来解糖系代謝の制御因子として転写因子 HIF-1 がよく知られていましたが、PGAM ではユビキチン化（Mdm2 による）や脱アセチル化などの転写後制御が重要である事を世界初で示しています。現在、我々の作成した全身発現型 PGAM TG マウスとコンディショナル KO マウスを解析中です。

上記以外に、「メタボローム」解析によるヒト血液老化マーカー探索も行っています。全身を循環する血液は、食習慣や生体コンディションを反映する有用な生体試料でもあり、老化研究の対象となりうると考えました。沖縄科学技術大学柳田充弘教授との共同研究により、液体クロマトグラフ質量分析（LC-MS）を用いた網羅的代謝物（メタボライト）の解析技術を発達させ、ヒト血液メタボローム解析の基本的な手法を確立しました。「老化・高齢者の多様性」は今後重要な課題であり、実際我々の血液メタボローム解析の結果より、ヒト血液メタボライトには個人差が小さいものと大きいものの2分類できます。さらに、若年と高齢者の血液メタボローム比較により、14 個の老化関連メタボライトの同定に成功し、そのうち 11 個は既知の発表のないものでありました。フレイルや栄養状況、他の加齢性疾患を対象としてメタボローム研究を現在推進中です。

防

防災研究所に着任してもうすぐ3年が経つところですが、着任当初からGSSには様々な形で関わらせていただきました。必修科目の1つである『グローバル生存学』の担当、研究室に在籍するGSS学生の指導、そして2017年度からはGSSの協力教員としてメンター担当や総括シンポジウムにも参加させていただきました。「グローバル生存学」の講義は、様々なバックグラウンドを持つ学生の皆さんとディスカッションをしたり、発表を聞いたりする機会があり、こちらにも刺激を受けることが多々あります。何より、GSSの学生の皆さんが国際的に様々な経験を積んで、忙しい中にも生き生きと自身の研究活動に取り組んでいる姿をととても清々しく感じます。

私は防災研究所に所属しており、水文学（すいもんがく）を基礎にした水災害リスクの軽減を研究しています。雨が降って河川に流れるまでの過程を、水文学では降雨流出過程と呼ぶのですが、世界各地には本当に多様な降雨流出現象があり、それをいかに理解し、モデル化するかが洪水予測や水資源管理にとって重要な課題となります。海外フィールドとしては、インドネシア・スマトラ島のバタンハリ川流域という場所を対象に、現地観測やモデル化による研究を進めています。土地利用変化や気候変動が水循環・水災害にどう影響しているかを明らかにすることが大きな目標で、そのためには自然現象としての洪水を理解するだけでなく、社会がどのように変革して、災害リスクにどう人々が対処してきたのかを知ることも大切です。スマトラ島では特に 1990 年代以降、大規模な森林伐採が進み、パーム椰子などのプランテーション開発が進みました。農地開発の過程で、森林土壌が締め固められ、水循環にも少なからず影響を及ぼしていると考えています。

GSS に関連する多くの課題は、現場を見ること、現地の人から話を聞くこと、様々な知見を総動員して現場で考えることが大切であり、そこがフィールド研究の魅力だと思います。ぜひ GSS の機会をフルに活用して、充実した大学院生活を送って下さい。



佐山 敬洋

防災研究所准教授



Sunmin KIM

金 善玟

工学研究科
社会基盤工学専攻准教授

私

は2017年4月よりGSSのメンター教員として活動を始めました。所属は工学研究科の社会基盤工学専攻で水資源に関して研究および教育を行っています。また京都大学国際高等教育院で英語による科目も多数担当しています。元の出身は韓国の大田で、京都大学へ留学するために2003年来日してから、学生、研究員、教員として14年あまりの期間を京都大学で過ごしています。

今の私ができたのは京都大学でお世話になった多くの先生方のおかげです。

初めての海外生活で右も左も分からなかった私が博士課程を無事に修了するまで指導していただいた實馨教授、研究員として働き始めたころ研究の本当の楽しさを教えていただいた中北英一教授、まだ未熟だった私を講師として受け入れ一人の教員として成長させていただいた椎葉充晴名誉教授、そして学生時代から今まで相変わらず私の面倒を見ていただいた立川康人教授。これらの先生方が京都大学にいらっしやらなかったら、今の私もいないでしょう。

今までいただいた沢山の教を GSS プログラムの中で学生たちに少しでも伝えることができればとても嬉しい恩返しになると思います。研究内容や GSS プログラム関連のみならず、特に留学生たちの学校生活に関しても力になりたいと思います。これから宜しくお願い致します。

私

は京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻社会疫学分野 (KUSPH) で専門教育を受け、京都大学大学院医学研究科にて医学博士を取得しました。現在はそちらで助教をしています。この社会疫学分野は「社会疫学的HIV研究に関する国連合同エイズ計画共同センター」としても指定されており、そこでは様々な高リスク群におけるHIV/エイズと性感染症の予防のための新しい「社会疫学的」方法を採用しています。また、特に国際保健の観点から、疾患と障害の予防や健康促進についても、幅広く関心を持っています。最近とりわけ取り組んでいるのは、京都大学のコミュニティにおける健康的なライフスタイルを促進するための、革新的で、実現可能・持続可能な方法を見出すことです。私は2007年から京都大学に（学生として、そして現在は教員として）在籍しており、その方針や教育課程に改善の余地があると感じています。そのため、大学のコミュニティの健康と福利を向上させることを最終目標として、京都大学において「健康大学イニシアティブ」を導入しました。

また研究とは別に、独自の教育課程（すなわち二重学位課程）の導入、共同研究の実施や指導などの様々な戦略を通じて、海外の著名な公衆衛生学の大学や施設との学際的・国際的協力の推進を目指し、KUSPHの支援を行っています。

2017年4月には協力教員として GSS プログラムに参加しました。また、京都大学のこの大規模な試みにより「学際的」大学院を築き、率先するという課題に取り組みたいと思っています。GSS の学生たちの熱心さには、日々感心しています。GSS の素晴らしい学生たちから学べること、そして彼らに貢献できることを待ち望んでいます。



Teeranee
Techasrivichien

医学研究科
社会健康医学系専攻
SGU インターナショナル・
オフィス特定助教

GSS 履修生の紹介

私

の最終的な目標は「グローバルな規模での感染症の拡大を予防すること」です。交通網の普及や、災害の発生や経済状態の変化、地球規模の環境変化・社会経済的変化・地域特有の文化、宗教的要因などによって、感染症は私たちの思わぬ場所が発生し急速に拡大するようになりました。医療が発達し効果の高い治療法がこの世界に存在はしていますが、感染症はそれらのないところで拡大し、結果的に多くの感染者・死者を出しているという現状もあります。

したがって、21 世紀において感染症の脅威から人々の健康を守るためには、一分野のみで課題解決を行うことは非常に難しいと考えられます。私はこれらの限界を解決するため GSS に入学しました。様々な学術的な視点を持った先生方、学生の皆様と触れ合うことで、とにかく 1 つの分野のみの狭さを痛感しますし、非常に多くの視点を学ぶことができていると日々実感しています。



武田 亮平

たけだ りょうへい

医学研究科 (L1)

私

は京都大学にて、学士（工学）を取得しました。卒業論文では、地表流—地中流と蒸発散成分からなる三次元物理モデルをベースとした水文モデルを開発し、そのモデルを信楽森林集水域の小さな流域に適用しました。今後は、「変化する気候下での極端な事象に対する将来の河川流量の推定についての研究」を行う予定です。

私の研究は、主に自然災害や巨大災害の GSS に関連しています。地球温暖化による河川流量の変化は、洪水や干ばつなどの深刻な水害につながる可能性があります。したがって、このような研究分野の成果は、将来の災害リスクを軽減するのに役立つと思われ、安全で安心なヒューマンライフに貢献するものと考えています。



アウリア フェビアンダ
アンワルティヌバン

工学研究科 (L1)

「ス

ポーツ」と聞いて、何を思い浮かべますか。

私は米国で運動・応用物理学を学び、アスレチックトレーナーとして主にスポーツの場で応急処置やリハビリに携わってきました。プロ選手のトレーニングをするという印象を持たれる方が多いようですが、実際は年齢や障害の有無に関わらず、スポーツをする全ての人々をサポートしてきました。帰国後、日本の「スポーツ」は「競技スポーツ」であるという認識が強いように感じ、衝撃を受けました。「生涯スポーツ」という別のカテゴリーがあったのです。

私の研究は、スポーツによる健康の維持促進についてです。日本でいう「生涯スポーツ」がテーマです。世界的に高齢化が加速する今、スポーツについて考えることはとても重要だと思っています。日本で年を重ねるとはどういうことかを考えながら、「楽しむ」ことを軸にした身体活動・運動・スポーツによる、心身の健康を考えていきたいです。



吉開 恵

よしがい めぐみ

医学研究科 (L1)

私

は、建築計画や都市計画において、環境や生態系を考慮したデザインができる建築家になりたいと考えています。研究の主題としては、「都市環境における人工的生態系の形成」です。そして、そのデザインにおいて技術的な手法だけでなく、地域の文化や社会性を考慮した研究をしています。

例えば、都市緑化について考察する際に、壁面緑化や緑地率分析による省エネ技術は進歩しつつあります。一方で、公園整備や壁面緑化増設、緑地帯の保護・形成が実際に行われていない場合が多く、その理由としては、地域性や社会的な不確定要因が挙げられます。都市における交通や職住などでも同様に、持続可能都市のための技術や手法が実際に利用されていないのが現状です。そこで、文化・社会的側面から技術を捉え、持続可能都市形成のために人工的な生態系を都市に築く研究をしています。



川上 周造

かわかみ しゅうぞう

工学研究科 (L1)

東

南アジア北西部に位置するミャンマーの中央部、バゴー山地の農山村部を調査対象地とし、地元住民の林野利用と自然景観の変遷についての研究を行っています。

ミャンマーでは軍事政権の支配が数十年にわたり、開発が遅れた結果、近隣の東南アジア諸国に比べて広大な森林が今なお残されています。バゴー山地でも、多くの人々がその豊かな森林資源に依存した生活を送っています。しかしながら、2011年に民政移管がなされ、ミャンマー社会は大きな転換期を迎えています。その社会的・政治的影響は少なからず、農村部の人々の生活や、人々が利用してきた森林にも影響しています。

過去から現在にかけて築かれてきた人々と自然の関係性を今、見つめなおすことで、今後急速に開発が進んでいくであろうミャンマーの持続可能な開発について考察したいと思います。



小林 美月

こばやし みづき

アジア・アフリカ地域
研究研究科 (L1)

ア

アジア・アフリカ地域研究研究科に在籍するママドゥ・サディオ・ディアロと申します。私は現在、「過去最大規模となった2014年のエボラ出血熱流行における社会学的研究」というテーマのもと、エボラ出血熱に関わる研究に取り組んでいます。この研究では、エボラ出血熱が地域社会に与えた社会的影響に着目しています。私は、2014年のエボラ熱で数百人の死者を出したフォレカリア（ギニア・コナクリ）で研究活動に従事しています。本研究で扱う主要テーマは、1) 内包的意味、2) 恥辱、3) 社会的抵抗、4) エボラ生存者と医療従事者の社会的再統合、5) 将来のアウトブレイクに対抗するより良い方策の5つです。本研究の最終目標として、「人々の間で疾病が広範囲にわたり流行することを予防するための地域レベルにおける回復システム構築の支援」に焦点を当てています。



ママドゥ サディオ
ディアロ

アジア・アフリカ地域
研究研究科 (L1)

「人

と森、そしてそこに住む野生動物。この三者がどのように共生するか?」

これが私の最大の研究テーマです。

2007年から東アフリカのタンザニアで、NHKなどの自然番組の撮影・制作を行ってきました。当初は野生動物の観察に夢中になっていましたが、アフリカの自然資源にも限りがあり、年々、開発で減少していることを知りました。そして、周りに住む人々は、より“豊かな”“先進的な”暮らしを求め始めており、人と自然のバランスがますます求められています。

調査地は、ザンジバル島のジョザ二国立公園。50km²と小さな国立公園です。絶滅危惧種のザンジバルレッドコロブスが生息する森があり、周囲には人々の生活圏が迫っていますが、保全策についてはまだまだです。GSSプログラムを通じて実態調査をし、実践的な知識を身につけ、世界中の生態系保全に活用できればと考えています。



野田 健太郎

のだ けんたろう

アジア・アフリカ地域
研究研究科 (L1)

私

は、アディスアベバ大学の社会科学部で社会人類学の学士号を取得し、現在は博士候補生として京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に在籍しています。

大学院では、「社会的・文化的視点から捉えたエチオピア・アディスアベバにおける固形廃棄物の管理」をテーマとした研究に従事しています。

本研究では、当該研究領域で数十年にわたって大きな課題となっている、持続可能な固形廃棄物管理の重要な決定要因となりうる社会文化的要因を明らかにすることに焦点を置いています。

なかでも家庭や地域レベルでの廃棄物処理は、調査すべき重要な課題の1つとして着目しています。さらに本研究では、対象地域と同様の社会文化的背景を持つ国や大陸でも応用する価値があると思われる、各地域独自の廃棄物管理法を調査することを目的としています。



ベケレ ハレグウオイン
メコネン

アジア・アフリカ地域
研究研究科 (L1)

GSS 履修生の紹介



宍倉 愛
ししくら あい

理学研究科 (L1)

私

の学位研究では、モナサイトをを用いたフィッション・トラック法 (FT法) を確立することを目的としています。FT法とは、鉱物中に含まれる ^{238}U が自発核分裂をするときに、固体中に残される約10~20 μm の長さの線状損傷(FT)を利用した年代測定法です。これにより、火山の噴火や断層の活動、山地隆起浸食等のような温度変化を伴う地質イベントの時期の推定が出来ます。

これまでのFT研究の成果として、世界の造山帯 (ヨーロッパアルプスやヒマラヤなど) や国内の山地 (木曾山脈など) での山地隆起史が明らかになっています。現在、このような研究にはFT法では、主にアパタイトやジルコン等の鉱物が用いられていますが、モナサイトはこれらの鉱物より低い閉鎖温度を持っていると考えられるため、より温度変化の小さいイベントの時期の推定が可能になると期待されています。これらの長期地殻形成の情報は、地域の防災政策の基盤や、現在問題になっている放射性物質の廃棄事業などの安全安心分野において必要不可欠なものになってきます。

GSSプログラムを通して、実際に防災政策を行う際に生じる倫理問題や、その他の学際的知見を得ることにより気がつける難点を知り、さらに自身の研究において得られる情報を共に学ぶプログラム履修生と共有することにより、持続可能な社会を作る助けになることが出来るのではないかと考えています。

編集後記

GSS Newsletter No.17 では、例年よりも2か月早く開催された「入学式・オリエンテーション」や、「新入生 (L1) の自己紹介」・「実習報告会」等に関する記事を掲載しました。すでに、中長期にわたる海外でのプロジェクトに着手している新入生もみられます。

9月の第2回GSS Homeroom Sessionでは、eポートフォリオ“GSSfolio (Karuta 1.1) システム”の概要説明後、(システム内で5年間の活動成果を記録する一覧表) “The 10 GSS Values & Long-Term Goals”について実習を行いました。今年度よりプログラムに参加された多彩な教員陣による後継事業への展開が期待されます。

GSS ニュースレター (No.17) 編集担当 近藤久美子

京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム
Inter-Graduate School Program
for Sustainable Development and
Survivable Societies
Newsletter No.17

平成30年1月31日発行

編集 京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム
ニュースレター編集委員会

発行 京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム
京都大学学際融合教育研究推進センター
グローバル生存学大学院連携ユニット
京都市左京区吉田中阿達町1
TEL 075-762-2197
URL <http://www.gss.sals.kyoto-u.ac.jp/>

GSSニュースレターはNo.17をもちまして、最終号となります。皆様にはご支援・ご鞭撻を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。